

(銀のエンジェル賞 中学生の部)

ニンゲンリヨク

中三・矢澤 宙空

私は咲来、中学三年生。まじめに生きているつもり。でも要領が悪く、頭も良い方ではない。私の周りには要領よく生きている子がたくさんいて、宿題もレポートも休み時間に友達のを丸写ししてAをもらい、その分、家ではたっぷり試験勉強をし、羨ましい試験結果を出す。私はどうだ？ 毎日一生懸命何時間もかけてレポートをやり、悪い頭を絞って宿題をやってもミスばかりで、提出物の評価も悪い。そんなことにいつも時間を取られ、試験勉強時間もとれないからテストの点も悪い。完全な悪循環だ。一つズルしたらうまく回りそうなことは分かっている。だけどまじめな両親に育てられた私の三つ子の魂はそういうズルを許さない。

先生は皆こう言う。

「先生にはズルをする子は分かるものです」

でも先生は知らない、生徒の方が何枚も上手であることを。頭が良くて要領がいい子が一生良い思いをして生きていくのが人間の世界なのだ。まじめに頑張ることなんて無駄なのだ。少子高齢化だし、人手不足だし、ドローンもAIも発達しまくりだし、このまま行けば人間が面倒くさいことなんて全部AIやドローンに任せてしまえばいい。だったらまじめに勉強なんてしなくてもいいんじゃないか、私はそう思うようになっていた。

中3の四月に新しい校長先生がやってきた。校長先生と言えば、

朝礼の話が長い、やたら偉そう、でもなんだか話しかけにくいおじいちゃんみたいな人、そんなイメージだった。

しかし新しい校長先生は全てが全く逆だった。とはいえ、何の取り柄もなく、札付きの悪でもない私が校長先生と接点を持つ機会なんて卒業証書をもらう日までないはずだ。しかし一つだけ気になることがあった。それは、私が校長室前を通るとき、なぜかいつも扉が十センチほど開いていることだった。

ある日のこと。扉の隙間がどうしても気になった私は、校長室前をゆっくり通過しようとしてみた。すると、

「どうぞ入って」

その隙間から聞こえたのは毎週月曜の朝礼で聞き覚えのある声だった。

「え？」

私がおどおどしていると扉の隙間が広がり、校長先生がぬっと顔を出した。

「校長室に興味を持っている咲来さんだよね、どうぞ」

特別悪いことも立派なこともしていないのに、こうして私は今、校長室に入るチャンスを得たのである。

校長先生の名前は山木聖と書いて「ヤマキノエル」。私たちの年代では珍しくもないが、校長先生の年齢を考えると、この手の漢字の読み方の名前はかなり印象深かった。眼鏡の奥から優しそうな目が私を見つめている。

「緊張しなくていいから。ところで君には悩みがあるよね」

会ったばかりでどうしてわかるのだろう。私はとても不思議に思った。しかし滅多にないチャンスである。私は勇気を出して日頃悩んでいる理不尽な現実についての悩みを緊張しつつも語り始めた。

校長先生はなぜかにこやかに私の話を聞いていた。それには多少違和感を覚えたが、私が話し終えると校長先生はこんなことを言った。

「実はね、私は校長先生じゃないんだ」

「え？」

「私はね二十年後から来たんだ。君のような子を救うためにね。だから校長先生じゃなくてノエルって呼んでもらっていいから」

校長先生はそう言うと、校長室に飾られた歴代校長の写真の中から一番端の初代校長の額縁を外した。するとそこには窓が現れ、その窓を開けると何かが校長室に舞い降りた。「これはTSD (time space drone) と言ってね、時間と空間を移動できるドローンなんだ。二十年後のドローンはね、時間も空間も同時に移動できて人も運べるんだよ。さあ乗って」

私は頭が混乱していた。まるで映画のようだ。しかしこの人は一体何者なのだろう。私はしばし悩んだが、校長先生の眼鏡の奥の優しい目は決してウソをついている目ではなかった。私は信じてみようと思ひ、ノエルとTSDに乗り込んだ。コンパクトなTSDの乗り心地は意外に良く、移動中も動いている感覚は全くなかった。例えるなら耳も痛くならず、気分が悪くもならない超高層ビルのエレベーター、そんな感じだった。しかも移動にかかった時間はたった十秒程度。快適な時空の旅だ。私とノエルは二十年後のある大企業の入っているビルに降り立った。しかし、そこは大企業が入っているビルにしては人が少なく、休日なのではないかと思うほどだった。「少子化が進んでしまったからね。人は少ないって感じるだろうね。でもこう見えて、仕事はなんとか回っているんだよ」

ノエルはそう言うと、私をオフィスに案内した。そのオフィスに

は三十席ほど机があるのに、人間が座っている机はたったの三つだけだった。

「今はみんな昼食に出ているんですよね」

「いいや、よく見てごらん。人間が座っている机以外には椅子がないよね」

確かに、椅子のない机の上のパソコンは勝手に画面が動いていた。

「分かったかな。この時代はね、1割が人間、9割がAI、どこもそんな感じなんだよ」

そしてノエルがオフィス内に3人しかいない人間の中の一人に向かって指を指すと、その人の頭の上に、その人の誕生から現在までの経歴が映し出された。その映像からは、悩み苦しみながらも、正直に真面目に生きてきた人であることが一目でわかった。

「彼の経歴を見てごらん。今咲来さんが悩んでいるようなことに悩み、いろんな失敗や経験を積んで来た人だっということが分かるよね。

彼のような人間がAIに支配されたこの世界で活躍できる人なんだ」

「じゃあそうじゃなく生きてきた人たちってどうなってしまったの」

「そういう人間はAIの部下になっているからここにはいない。寂しいことだけどこの時代ではAIに完全に使われてしまっている人がたくさんいるのも事実だから」

「でもそれにしてもどうしてこんなに人間が少ないの？ 優秀な人はたくさんいるはずでしょう？ 今の私たちのクラスにも学年にも成績がいい子はたくさんいるんだよ」

「この時代の企業だって当然優秀な人を採用したい。だけど要領の良さだけで生きてきた人間なんて、この時代のAI搭載のロボット

からしたら笑っちゃうレベルの要領の良さなんだよ。この時代ではそれを優秀とは言わない。この時代が欲しがっているのは、人間にしか創ることができないアイデアとか経験なんだ。それを生み出すことができるのは、子どもの頃からこつこつまじめに頑張って成長してきた人間だけ。でも残念ながらそんな人間はもはや国宝級に少ない。AIで補えない部分は超人手不足というわけ。AIには作り出せない本物の人間力がものすごく必要なんだよ」

ノエルは私にこの時代の問題点として最後にこんなことを話してくれた。

「この国は二十年前より遥かに便利になったかもしれないけれど、経験を積んで自分の頭で想像してものを創ることが出来る人間は極端に減ってしまった。面倒なことはみんなAIにやらせればいいって思うようになったからね。咲来さんも思い当たることないかな。学校の宿題の作文面倒だなあ、じゃあネットで拾った文章コピペして出しちゃおう、とか、社会のレポート、ググって継ぎ接ぎして済ませちゃおう、なんてね。ちなみにこの時代ではググるって言葉も死語だけどね。ググる必要もないくらいAIが進化しちゃったから。普通の生活で何か疑問に思うことなんて何もない。でもそれって実は退屈だよ。人間らしい生活って何だろうって考えてしまう。便利になりすぎると人間は退化するんだよ。私はこのままじゃまずいって思ってるんだ」

私は大人になるのがますます嫌になった。「でもガツカリしないで。この時代でも人間にしか出来ない仕事、役割は当然存在しているんだから。そもそも人間がAIを創ったのは人間が快適に生活できるためだったはず。それがいつの間にか、誰のためのこの国か分からなくなってきたしまった。私が考えるその原因の一つはね、今この

時代を中心的に背負っている世代に、子どもの頃から悪い意味で要領よく生きてきた人間が多いってことなんだ」

「それどういうこと？」

「つまり、今働き盛りの大人たちは、二十年前子どもだった咲来さん世代なんだよ」

私はハッとした。

「ねえ、ノエルって一体何者なの？」

「うーん、なんて言えばいいかなあ。まじめに頑張ることが無駄ではないことを伝える二十年後からやってきた伝道師とでも言っておこうか」

私たちは再びTSDに乗り込み、校長室へ戻った。

「どうだった？」

ノエルが言った。

「私、これからもズルしないで頑張ってみるよ。たくさん回り道や失敗するだろうけど」

あの日から二十年、私は三十五才になり、デザイナーの仕事をしている。こういった仕事は人間が担うべき仕事としてまだ残っているのだ。私は二人の子どもを保育園に迎えに行き、急いで家に帰った。すると玄関からカレーのいい香りが漂ってきた。

「お帰り」

と先に仕事から帰宅していた夫がエプロン姿で現れた。かつては女性の負担が重かった共働き世帯の家事問題は私の時代では全くない。それもAIやドローンが進化して私たちの生活を助けてくれるようになったからだ。子育てには昔と同様に手はかかるが、ここにこそAIたちのおかげで余裕が出来た人間力を使うべきだろう。夫の作ってくれたカレーを食べながら、私は賑やかな食卓を囲んでいた。

「そうだ、確か今日、国会で新しい内閣総理大臣の所信表明演説があったはず」

夫はそう言うのとテレビをつけた。ちょうど七時のニュースが始まったところだった。私は子どもたちに、

「カレーこぼさないで食べてよ」

と言いながら、ちらっとテレビに目をやった。しかし、その私がカレーをこぼしてしまうほどの衝撃が、私の目に飛び込んできた。

『（議長の声）内閣総理大臣から所信について発言を求められております。これを許します。内閣総理大臣 山木 やまき 聖 のえる くん』
